クモのイトクズ

qedqed

クモのイトクズ

「今回は長い出張だったなぁ・・・。さすがに疲れたわぁ」
私は半年振りに人間界から天界へと帰ってきた。
もっと早く帰れるはずだったが、想像以上に仕事が長引いてしまったのだ。
それというのも、昨今は人間界の荒れ具合がひどく、
死後に地獄界へ行かされる人間が多くなっているからだ。

それの何が問題かというと、私が勤務している会社は、
天界に導かれた人間の天界での住居を紹介するのが仕事なのである。
人間界でいうところの不動産屋といったところか。
つまり、天界に導かれる人間が少ないと何かと困るのだ（特に給与面で）。

そんなわけで人間界へ出張し、悪行を行いそうな人間がいれば、
天使の力を使って改心させ、思い止まらせていたのだ。
ただ、次から次へとそんな人間が現れる。繰り返し繰り返し行う人間も多数いた。
なにも全く悪行を起こさない人間だけが天界へ導かれるというわけではない。
そんなことはまず不可能だ。だからこそ、
小さな嘘・不貞・いたたまれない犯罪・どうしようもない事故などは、
具合にもよるが良しとしている。もちろん、最終的には上の判断に委ねられるが・・・。
それなのに！一体どうなっているのよ！！

怒っても仕方がない。仕事はきっちりしてきたのだ。
とにかく休みたかったが、上司に所長に報告しなけば。
バス停でバスを待っている間、奥様方の噂話が自然と聞こえてきた。
うちの所長のことも・・・。

「神様、聞きましたよ～」
私は自分の会社に戻り、人間界の報告よりも先に所長である神様に話しかけた。
「何のことじゃ？」
神様はいつも通り今にも寝てしまいそうな顔をしていた。
呑気なものよね。業績を一切気にしないのはこちらとしては助かるけど、
あまりにも他人事なのよね・・・。でも、今回聞いた噂は少し違っていた。

「蜘蛛の糸で地獄に落ちた人間を助けようとしたそうじゃないですか！我が社のことを考えて少しでも人間を増やそうとしたのでしょ！素晴らしいです！！」
それを聞いた神様はぽかーんとしていた。心当たりがないようだ。

少し考えて、ようやく思い当たる節があったようで、
ふぉっふぉっふぉっとよく分からない笑い声を出しながら、
「お前知らんのか？そうか、長く人間界に出張していたからのう」

私が？を頭の上で浮かべていると、
「そもそも蜘蛛の糸で人間が吊れるわけがなかろう。あれは天界特製の糸で人間を１万人吊っても切れはせんよ」
「じゃあ、何故切れたんですか？」
「わしが自ら切ったんじゃよ。あんな大勢の人間をつり上げるのはさすがに疲れるからのう」
「つり上げる？」
「今のう、天界では”釣り”が流行っておるのじゃよ。ただし、釣り上げるのは地獄界の人間じゃけどな」
私は頭痛がしてきた。この大事な時に釣りだと！
だけど、理由はさておき釣り上げた人間は天界に導かれることになるのよね。
ということは、天界の人間が増えると。結果オーライじゃない！あれっ？
ふとした疑問が頭に浮かんだ。

「でも、私は”蜘蛛の糸で助けようとした”と聞きましたけど？」
「ここ最近、人間界への情報漏えいが問題化しとるじゃろ。天界に導かれる基準とか、天界の様子とか、神のヘアースタイルとか、神のカツラ疑惑とか」
後半は別に構わないが、確かに多い。おそらくシステムエラーだとは思うが、スパイ疑惑も根強い。
「もし人間界へ釣りの話が流れても、助けようとしたという美談にすれば面目が保たれるじゃろ？」
クラクラしてきた。でも、流行っているということは・・・
「他の神様もしてるんですか？」
「そうじゃ、大抵は今回のように釣り上げることができず自ら糸を切ることになるんじゃがな。わしなんて、今まで釣り上げた人間は３人だけじゃ。人間というものは本当に欲深いのう」
人間が欲深いことは今回の出張で実感したから同意するが、このおっさんはこの半年何をやってたのよ！
まぁ、３人の人間を天界に導いたのだから許してやるか。
「でも、そもそも釣り上げてしまった後は手続きが大変だったでしょう？」
「お前は甘いのう。もちろん、キャッチ＆リリースじゃよ」
さすがにぶん殴ろうかと思ったが、我慢我慢。次の職を探すのも疲れるしね。

「それでは、遅れましたが今回の出張の報告をさせていただきますね」
怒りをグッと堪え、話始めた途端、

「おっと、もうこんな時間か。釣りの約束があったんじゃった。報告は夜にでも家に来てしておくれ」
席を立とうとした神様の右足を思いっきり踏んでやった。